

# 交流から生まれる元気のもと



## 地域づくり

西川町大井沢区

佐藤 征男

西川町の大井沢区が平成十四年度の第四十一年農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞した。本県でのむらづくり部門の天皇杯受賞は昭和六十二年度の寒河江市清助新田以来である。

大井沢区は西川町の最奥に位置し、北には霊峰月山、南には峻嶺なる朝日連峰を配し、清流日本一にも輝いた寒河江川沿いの八ヶ岳に八つの集落が点在する実に風光明媚な環境にある。

古くは月山・湯殿山参りの宿場町として栄え、宿坊や農業、炭焼き、養蚕などが主な産業であった。昭和二十九年の町村合併時に一、五〇〇人を数えた人口も、高度経済成長など時代の影響を強く受け、昭和四十五年には九〇〇人に激減した。

産業分野においても、炭の需要は減少し、農業においても厳しい自然環境の中にあつて安定した収入が見込めないため、区民の間には、「クドキ・ナゲキ・ボヤキ」の「3キ」意識が内在するようになっていた。

昭和四十六年、そんな地域の意識を何とかしなければと始めたのが、ふるさと民宿だった。当時二十二軒がこの事業に取り組み、素朴な人柄と、「安くて量の多い山菜料理」が大変な好評を得たものだった。

農業面においても、高冷で条件不利ということを手にとつた取り組みが芽生え、昭和五十年代には、高冷地だからこそきれいな色となるリンドウの栽培に取り組んだ。その後ユリ、トルコキキョウ、ストックなどを栽培し、試行錯誤を繰り返しながら、ようやく銘柄確立ができたところである。

また、昭和六十年代からは、国有林の許可を受け、山取りの花木の出荷を開始し大変な好評を博しているところである。平成五年からは需要に応じるため、転作田への花木の作付けを大規模に始めた。

このような取り組みを実施してきたが、依然として過疎はとまらず、農地にも荒れ地が目立つようになってきた。ふるさととの風景が荒れていくのを実感し始

めた。こんなに寂しく悔しいことはない。

そこで平成十二年、従来あつた営農集団の「大井沢そば作付組合」を法人化し、「大井沢農作業受託組合」を組織して、地区内の荒廃農地十五ヶ所を集約し、「そば」の作付けを行った。九月上旬、大井沢の風景は一変した。一面のそばの白い花は周りの自然景観とマッチし、美しい農村風景を創りだしたのである。

そして、ふるさと民宿では、香りの高い地元の玄そばをつかった手打ちそばを提供する「大井沢そば街道」を旗揚げし好評を得ているところである。

このほか、農業の取り組みとしては、キノコの栽培がある。平成十二年にはキノコが大井沢区での農業生産額一位となり、春の山菜を含めた販売ルート確立のために昭和六十年に「大井沢特産品製造販売組合」を設立し販売拡大に努めている。

これら農業の取り組みとあいまって、人の動きにも変化が現れるようになってきた。平成二年の寒河江ダム完成を機に開催してき

住民総参加で行った九九年の雪まつり



たのが、「大井沢雪まつり」である。「ダムの上流に栄えた歴史はない」という言葉を跳ね返す意気込みをもって開催した雪まつりだった。七十五歳以下の大井沢住民全員が実行委員となる大井沢区民総出による手作りのまつりだった。当初は開催について疑問視する区民もいたが、回を重ねるにつれ意識も高揚し、第十回から募集した「学生助っ人隊」の力を借りながら、できるかぎり今後も開催していくことにしている。第十三回目の平成十四年は、大井沢の人口の二十倍以上に相当する七、

一〇〇人が訪れ、町・県を代表するまつりにまで成長してきた。

人の動きとしては特に、青壮年の台頭がある。平成十年に設立した「大井沢の元気を創る会」は、大井沢に住む四十五歳以下の区民を会員とし、大井沢の地域づくりに関する提言をすることを主な目的に活動を展開している。提言の主なものには、雪まつりでの「学生助っ人隊」の募集や大井沢の「温泉施設周辺整備計画」づくり、「大井沢ふるさと応援団設立」の提言などがあり、大井沢区としても、若者の意見として尊重し実際の取り組みに反映しているところである。

釣った魚を川へ返す寒河江川のキャッチアンドリリース区間の設定もその一つである。川の自然環境の保存と魚と人間の共存を目的に設定したもので、魚の生息数が回復し、大井沢を訪れる釣り人を飛躍的に増加させる効果をもたらすことになった。三月の釣り解禁日を境に、全国から大勢の釣り人が訪れ、ふるさと民宿の経営にも大きく影響を及ぼしているところである。

以上申し上げたことが、大井沢の地域づくりの概要であるが、この他にも「自然と匠の伝承館」の「巧人クラブ」など、地域づくりに取り組んでいる団体が他にも存在している。

これらの自発的な取り組みこそ大井沢の地域づくりの原動力であり、それをバックアップするのが大井沢区である。

そしてこれらの取り組みの陰には、大井沢が月山・湯殿山参りの宿場町として栄えた時代から引き継いだ「交流」が生かされていることに気づかされる。

この「都市と農村の心と心の交流」が新し

い風を吹き込み、地元民のすさんだ意識を好転させ、新たな発想や取り組みにつながっていると確信するのである。

大井沢の地域づくりのキーワード、それは昔も今もそしてこれからも一貫して「交流」である。最近、都会から移り住む人が、少しずつではあるが、増えてきたことは大変喜ばしいことであり、仲間として大歓迎である。こういう方々が出現してきたのも、これまでの私どもの取り組みの成果ではないかと自負しているところである。交流を重ねることにより、大井沢の豊かさが知れ渡り、大井沢を愛する人々の外部からのゆるやかな移住を継続させることができれば、大井沢はまだ大丈夫であると感じている。

地域づくりはいつたい何のためにやるのか。私は、生まれたこの大井沢で、これからも楽しく生きていくためだと考えている。そんな意味からすれば、大井沢の地域づくりは、まだまだこれからが本番であり、息の長い取り組みなのである。今後とも危機意識を持ち、守りに入ることなく、常に攻めの気持ちを持ちながら地域づくりに取り組むことが重要であると考えている。

## 佐藤 征男

西川町大井沢区長。  
西川町議会議員。  
西村山郡西川町大字大井沢483-1  
昭和13年1月生まれ。  
昭和42年、大井沢造林設立。  
平成11年、西川町議会議員。  
平成14年、大井沢区長就任。